

令和7年度 上三宮小学校・小規模特認校評価（二次評価）

A：十分な成果がある。
B：一部成果がある。
C：一部成果があるが未達成部分が多い。
D：成果が出ていない。

評 価 の 観 点		R 7 の 状 況	評 価	評価の理由及び課題等
(1) 学校組織 R6⇒R7 （いっしょに学ぶ 力）	ア 学級数、児童数、 教員数の確保 ※○数字は市配置職員数	①複式学級の解消	B	・全校生23名で、小規模特認校制度を利用して在籍している児童は17名である。本年度、小規模特認校制度による転入学は3名あった。小規模特認校としての認知は定着しつつある。 ・特認校制度を利用した特色ある取り組みについても理解が深まり、魅力を感じている児童や保護者は一定数いる。小規模のメリット等を広く発信、整備し、今後もプログラミング教育等、上三宮ならではの魅力ある取り組みを続ける必要がある。 ・児童の特性上、小規模校を求める子どもや保護者は少なからず数存在すると思われる。学校のメリットを発信し、整備するなど、持続的な活動は、今後必要である。
		②全校児童数		
		③上三宮小学校区の入学者数		
		④小規模特認校制度の転入学者数		
		⑤その他の転入学者数		
		⑥学級担任数（教諭、講師）		
		⑦養護教員数（養護教諭、助教諭）		
		⑧学校事務職員数		
		⑨支援員等数(ALT、専科教員を除く)		
(2) 教育活動	ア 特色ある教育活動 等の推進 （授業時数特例校）	①英語教育 ・使える英語の基礎の習得 ・専門教師による授業の実施 ・オンラインによる英会話レッスンの実施 ・海外の様々な文化に触れる機会の設定 ・英検Jr 等	A	・オンライン英会話レッスンにより、英語に対する抵抗感が低くなっている。レッスンで学習した内容を通常の英語科での授業に生かす場面が見られた。また、英検Jr.では受検した児童がブロンズクラスに合格したことで、自信をもって英語の学習に取り組むことができた。英語教育の充実を学校の特色として継続するためには、専門の指導者と系統性を考えたカリキュラムが必要である。 ・プログラミング教育に関して、小規模特認校開始当初からの講師が児童の能力を把握し、的確な指導を行っているため、児童のリテラシーが向上し、より高度な課題に取り組めるようになった。 ・全教職員が家庭環境や能力・個性などを把握しており、どの場においても適切な、丁寧な指導ができています。 ・特色ある教育活動については「授業時数特例校」として、他の教科の時数を英語やICT教育の時数に振り替えているが、今後については、特色ある教育活動の内容について、教職員定数を踏まえ、授業時数の見直しを進めていく必要がある。
		②ICT教育 ・情報活用力の育成 ・プログラミング学習の推進 ・授業内外のICT機器の効果的活用 ・他校との合同授業の実施 ・ICTを活用した学習支援・相談 ・大学等との連携		
		③個に応じた指導 ・きめ細やかな指導と支援等 （小規模のよさを活かした授業の充実、 一人一人のニーズに応じた支援の充実）		
		④体験活動、地域との連携 ・豊かな環境を活かした体験学習 ・地域と連携した活動 ・他学年との交流学习等		
	イ 児童の成長	①学習面 ・社会に必要な資質能力の育成 （主体性、協働性、表現力、課題解決力等） ・個別最適な学び、協働的な学びの推進 （主体的、対話的で深い学び） ・各種学力調査等	B	・学力については理解度や達成度などに個人差はあるものの、児童の学習スタイルや理解度に合わせたきめ細かな学習指導を行うことができている。 ・児童の表現力や主体性を育むため、ICTを活用したり、学校行事、総合的な学習の時間などを利用したりして、表現する場を意図的に設けた。 ・小規模校の利点をふまえて入学・転学してきた児童の中には、生徒指導上の課題を抱える児童がいる。児童に寄り添った対応を行うことで改善が見られる児童がいる一方で、アプローチが難しく、芳しい進展が見られない児童もいる。今後も継続した支援と関係機関との連携が必要である。
		②生活面 ・基本的生活習慣の定着 ・学校、学級への所属感、満足感		
		③その他 ・卒業後の子どもの活躍等		
(3) その他	ア その他	①その他 ・市のモデル（フロントリーダー）となる、先進的かつ顕著な成果 ・小規模特認校制度の広報周知活動 ・地域からの主体的、積極的な支援等	B	・市校長会などでのオリエンテーションや募集チラシの配布、ホームページでの広報、オープンスクールを通じて、本校の教育について広く周知した。加えて「就学時健康診断」時における広報活動を3校で実施した。 ・学校運営協議会や公民館、まちづくり協議会、民生児童委員などの支援により、学校と地域が連携し協働する体制が整備され、維持されている。 ・「緑化推進運動功労者表彰」において、「内閣総理大臣賞」を受賞した。約50年間にわたり、「花いっぱい笑顔いっぱいの上三宮」をスローガンに学校と地域が連携して取り組んだ活動が評価された。

【総合評価】 教育委員会記入：〔継続〕〔改善〕〔停止〕

継続	令和7年度は、小規模特認校制度により3名が転入学し、全校児童が23名となった。1年生と2年生が単式学級で、低学年の大事な時期の指導を充実して行うことができた。小規模特認校の認知度が高まり、「上三宮で学ばせたい」という保護者が増えてきている。 本校の特色は、充実した英語教育とプログラミング教育である。英語学習では、オンライン英会話レッスンにより、児童のリスニング力、スピーキング力、コミュニケーション力が向上し、英語に対する抵抗感が低くなっている。また、1年生から歌やゲームを取り入れ、楽しく英語に親しんでいる。プログラミング教育に関して、小規模特認校開始当初からの講師が児童の能力を把握し、的確な指導を行っているため、児童のリテラシーが向上し、より高度な課題に取り組めるようになった。 指導にあたっては、全教職員が家庭環境や能力・個性などを把握しており、どの場においても適切な、丁寧な指導ができています。理解度や達成度などに個人差はあるが、児童の学習スタイルや理解度に合わせたきめ細かな学習指導を行うことができている。 小規模特認校の広報周知活動について、学校は、オープンスクールや学校ホームページなどによる積極的な情報発信を行い、特色ある教育活動の理解促進を図った。学校の理解の深まりとともに、小規模特認校制度を利用した本校への編入学を希望とのニーズが一定数出るものと予想される。学校運営協議会や公民館、まちづくり協議会、民生児童委員などの支援により、学校と地域が連携し協働する体制が整備され、維持されているので、今後も地元保護者等と地区外保護者との良好な関係を築いていけるよう、配慮をしていく必要がある。 以上、本制度による一定の効果が認められるものであり、小規模特認校を継続することが適切であると評価する。
----	--